

話し手責任と聞き手責任：
発話理解における話し手の貢献度の日韓比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23465

話し手責任と聞き手責任 —発話理解における話し手の貢献度の日韓比較—¹

人間社会環境研究科 博士後期課程 1年 尹 秀美²

< 概要 >

本研究は、日本人話者と韓国人話者の発話理解における貢献度の違いを明らかにすることを目的とする。ハインズ (Hinds, 1987) は発話理解における「話し手責任」・「聞き手責任」という基準により言語を分類し、日本語と韓国語は両言語とも「聞き手責任」の言語に分類されると指摘した。しかし、本研究では、日本語は「聞き手責任」の言語であるが、韓国語はむしろ「話し手責任」であるという仮説を提示し、それを検証する。

この仮説を検証するために、日本人と韓国人の会社員および大学生を対象に記述式アンケート調査を実施した。日韓で対応するように設定された場面で、日本人と韓国人が用いる可能性のある表現を量と形式の点から比較した。

その結果は、会社員と大学生共に以下のようなものである。

- (1)日本人に比べて韓国人のほうが発話の量が多い。
- (2)日本人に比べて韓国人のほうが発話意図と一致する発話形式を使う。

< キーワード >

発話理解、話し手責任、聞き手責任、日本語、韓国語

¹ 本研究の一部は、2009年9月18-20日に熊本学園大学で開催された国際異文化間コミュニケーション学会 (International Association for Intercultural Communication Studies) 第15回大会 (IAICS2009) において口頭発表したものである。なお、本研究は、大学院教育改革支援プログラム (大学院 GP) 「プロジェクト研究を通じた自立的研究者養成」から研究助成を受けた。これにより東京近郊およびソウル近郊での調査が可能になった。

² E-mail: smy8005@hotmail.com

<目次>

1. はじめに
2. 研究の背景および目的
3. 調査方法
 - 3.1. 会社員を対象にした調査
 - 3.2. 大学生を対象とした調査
4. 調査結果
 - 4.1. 発話量
 - 4.2. 発話形式
5. 考察
 - 5.1. 発話量
 - 5.2. 発話形式
6. おわりに

1. はじめに

ガンパーズによれば、会話において話し手は聞き手に対して発話の意図を理解させるための枠 (context) を言語的・非言語的手段を用いてメタコミュニケーション的に合図するという (Gumperz, 1982)。そのような合図はコンテキスト化の合図 (contextualization cues) と呼ばれる。尹 (2008) と Yoon (2008) は、日本人夫婦および韓国人夫婦の会話を分析し、コンテキスト化の合図として韓国語では呼びかけ表現 (address terms) を頻繁に使用するが、日本語ではフィラー (fillers) を用いる傾向があることを明らかにした。

このようにコンテキスト化の合図として利用される言語的手段が異なるのはなぜだろうか。その理由の一つとして Yoon (2009) は、日本人夫婦と韓国人夫婦の会話のデータに基づいて、コンテキスト化の合図として利用される言語的手段が両言語で異なるのは、会話における話し手と聞き手の発話理解への貢献度が日本語と韓国語で異なるからであると論じている。本研究では Yoon (2009) の主張をより説得力のあるものにするため、Yoon (2009) の調査対象者 (実際の夫婦) と調査方法 (実際の会話の録音) とは異なる方法で調査を行う。それによって、日本人の話し手と韓国人の話し手の発話理解における貢献度の違いを検証する。

2. 研究の背景および目的

ハインズは、コミュニケーションの成功に関して、話し手に主な責任があるとするのが <話し手責任> (speaker-responsibility)、聞き手に主な責任があるのが <聞き手責任> (listener-responsibility) であるという基準により言語の類型化を試みている (Hinds, 1987)。たとえば英語は <話し手責任>、日本語は <聞き手責任> という傾向があると指摘する。そして、<聞き手責任> に類型化されるのは日本語だけでなく、韓国語や古代中国語もそのグループに属すると主張している (池上 (2001) も参照)。

日本語が <聞き手責任> の言語であるという指摘は、コンテキスト化の合図としてフィラーを使用する傾向があるという尹 (2008) および Yoon (2009) の調査結果からもうなずける。しかしながら、任 (2006) が日本人と韓国人のコミュニケーション・スタイルを分析し、「喋らせる韓国人と聞き上手の日本人」と指摘したことが正しいとすれば、韓国語も日本語と同様に <聞き手責任> の傾向があるというハインズの主張には、疑問の余地がある。また、尹 (2008) および

Yoon (2009)の調査から、韓国語話者は積極的に呼びかけ表現を利用して話者の意図を頻繁に合図しているという結果は、ハインズの分類を肯定しない。

本研究では、日本語は<聞き手責任>で韓国語は<話し手責任>であるという Yoon (2009)の主張をより説得力をもって論じられるように、Yoon(2009)の調査対象者(実際の夫婦)と調査方法(実際の会話の録音)とは異なる方法で調査を行なう。それによって、日本人の話し手と韓国人の話し手の発話理解における貢献度の違いを例証する。

3. 調査方法

本研究では日本人と韓国人の発話理解における話し手の貢献度の違いを明らかにするため、両国人の発話量と発話形式を比較分析する。発話量とは、文字通り話し手が発した情報量であるが、例えば、友達から手紙をもらって、ただ「ありがとう」とだけ言う人と、「ありがとう。久しぶりに手紙をもらってとても嬉しい」と説明を加えて言う人の発話量は異なる。後者のほうが、情報量が多く、自分の嬉しい感情を積極的に聞き手に伝えようとしている。つまり、<話し手責任>と<聞き手責任>という観点からすると、前者に比べて後者のほうが<話し手責任>の傾向があると言えるだろう。

また、発話形式とは、話し手が用いる文形式のことであるが、例えば、鉛筆を借りたい場合に「鉛筆貸して」という表現と「鉛筆使っていていい」という表現ではその形式が異なる。前者は直接的な指示表現形式をとっているが、後者は許可をもとめる疑問形式による間接的な要求である。これを<話し手責任>と<聞き手責任>で分類すると、前者が<話し手責任>、後者が<聞き手責任>という傾向に分類可能であろう。

本研究では、調査対象者を会社員と大学生の2つのグループに分け、それぞれ記述式アンケートに記入してもらおう。アンケートの設定場面や記述方式は、両グループで少し異なる。しかしながら、調査対象者の多様性を反映させられるほど正確な調査は、今回は実施していない。また、実際の調査対象者の会話を録音するなど、音声レベルでの調査も行っていない。このように本研究は、様々な人間関係において音声レベルの調査をする前段階としての予備調査という位置づけではあるが、これらの調査においても日韓の明確な違いが明らかになることが十分に期待できる。

なお、本研究は、Yoon (2009) に基づき、次のような仮説を立てる。

- 1) 発話量：日本人に比べて韓国人の発話量（情報量）が多い。
- 2) 発話形式：日本人より韓国人が発話意図を明確に伝えられる発話形式を用いる傾向がある。

3.1. 会社員を対象にした調査

会社員の調査で設定された場面は、「謝罪」「感謝」「依頼」「勧め」の4つである。それぞれの場面ごとに対話相手として上司・同期・部下の3人を想定させ、それぞれの相手に対して調査対象者がどのような表現を使用する可能性があるかを尋ねた。

また、調査対象者は、20代の日本人および韓国人の会社員である。調査対象者は全員、大学卒以上の学歴を有し、それぞれの国の首都である東京とソウルに所在する会社に勤務している。

3.2. 大学生を対象にした調査

大学生の場合も会社員の場合と同様に、「謝罪」「感謝」「依頼」「勧め」の4つの場面が設定されている。学生を対象とした調査では、会話の相手を、会社員の場合のように上司・同期・部下の3人に分けて調査していない。しかし、単純に「どう言いますか」のように聞くのではなく、未完成の会話部分に適切な表現を記入して会話を完成するようになっている。なお、大学生の調査対象者は、それぞれ日本と韓国の首都圏に所在する大学に通っている日本人および韓国人大学生である。

4. 調査結果

本研究の調査結果は、会社員の場合、日本人と韓国人の20代の会社員から得られた。その数は、日韓共に女性4名、男性8名である。また、大学生の場合は、日韓の男女それぞれ10名ずつである。これは、回収した回答全体からサンプルを取って調査をしたからである。したがって、この数はアンケート調査という方法を用いた割にはかなり少ないと思われるかもしれない。しかし、前述したように、本研究は、音声レベルでの調査のための予備調査であり、また記述式アンケートの結果の全体は抽出されたサンプルの結果と顕著な差が見られなかったことからサンプル数の少なさは、さしあたり無視し

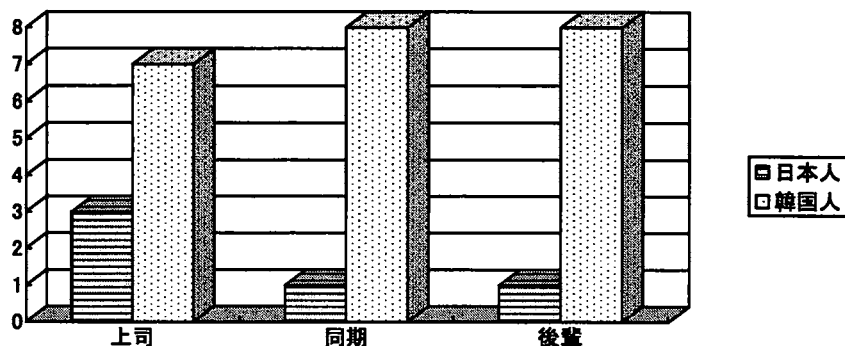
ておいてよかろう。

4.1. 発話量

最初に全体の結果をまとめて述べると、会社員と学生の場合とも、同じように設定された場面では、日本人に比べて韓国人の発話量が多い。つまり発話量に関して、調査方法のところで述べた仮説を確認する結果が得られたのである。以下では、グラフを参照しながら詳しく説明する。

(1)－A 謝罪（会社員）

場面(1)－A は、謝罪の場面での韓国人と日本人の発話の比較結果である。この場面における設問は「あなたは会議に10分ほど遅れました。以下の相手にどう言いますか。」である。そして、この質問に対して予想される基本的な答えは「遅れてすみません。」である。この予想される答えである「遅れてすみません」、つまり謝罪をする際に一般的に用いられる謝罪の慣用的な言葉の他に別の発話をした調査対象者の数を日本人と韓国人で比較調査した。



グラフ 1. 謝罪の言葉以外に別の発話をした会社員の数

グラフ 1 は、謝罪の場面における日本人と韓国人の、それぞれ上司・同期・部下に対しての発話量を表したものである。日本人に比べて韓国人のほうが、全ての相手に対して、「遅れてすみません」のような「謝罪表現」以外に別の情報を発話して加えている人の数が多いのが分かる。つまり、日本人に比べて韓国人の発話量、すなわち情報量が多い。

結果を詳しく見てみると、日本人は、上司に対しては男女合計 12

人のうち3人が別の発話をして、相手が同期や部下の場合は、それぞれ12人のうち1人ずつだけが他の「遅れてすみません」に加えて他の発話をしている。

一方、韓国人は、上司（7人）・同期（8人）・部下（8人）のように、全ての相手に対して50%以上の調査対象者が謝罪の表現だけではなく、それに他の発話を加えている。

(1) -B 謝罪（大学生）

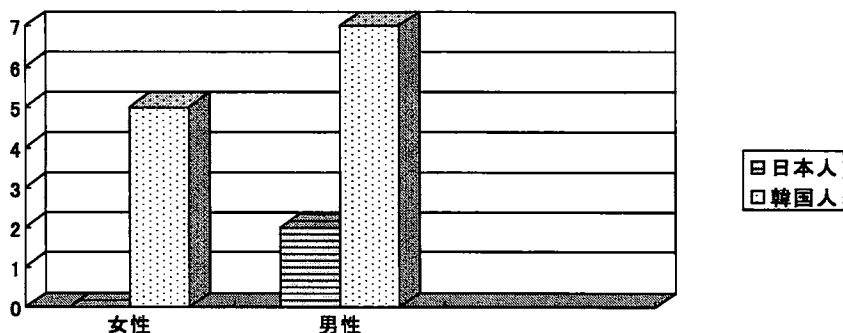
場面(1)-Bでは、大学生の謝罪場面での発話量を調べるために、次のような会話状況を設定した。すなわち、レポートを提出するために教員の研究室を訪れたところ教員からレポートの締め切りが過ぎたと言われる。

教員：レポートの締め切りはおとといまでだったんですが。

あなた：

()

教員：いいえ謝らなくてもいいです。



グラフ 2. 謝罪の言葉以外の発話をした大学生の数

グラフ 2 は、教員に対して「謝罪表現」以外に他の発話をした大学生の数を示したものである。グラフ 2 を見ると分かるように、女性と男性共に、日本人に比べて韓国人のほうが発話量が多い。特に日本人の女性は、全員が謝罪表現だけ言い、その他には発話をしていないことが目立つ。そして日本人男性も、「謝罪表現」以外の発話をした人の数は、全体の20%にすぎない。

一方、韓国人の場合は、男女共に 50%以上（女性：50%、男性：70%）の人が、レポートが遅れるようになった理由などを付け加え、「謝罪表現」だけを言ってはいない。

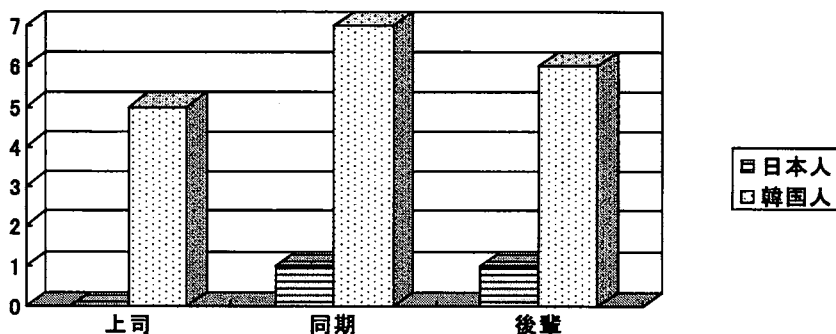
(2)－A 感謝（会社員）

場面(2)－A は、感謝の場面での日本人と韓国人の発話量を比較する。質問は「以下の相手があなたにサンドイッチを買ってくれました。あなたはどのように言いますか」である。この質問に対して予想される基本的な応答は「ありがとうございます」のように感謝の気持ちを表すために使われる感謝の言葉である。ここでは、日本人と韓国人の発話量を比較するため、感謝の言葉に加えて、他の発話をした日本人と韓国人の調査対象者の数を調べた。

グラフ 3 は、場面(2)－A で予測される答えである「ありがとうございます」のような感謝の言葉に加えて他の発話をした日本人と韓国人の数を表わしたものである。感謝の場面でも、(1)の謝罪の場面と同じく、全体的に日本人に比べて韓国人のほうが、感謝の言葉に加えて他の発話をした人の数が多いことが分かる。

日本人は、特に上司に対して全ての人々が「ありがとうございます」という感謝の言葉だけを言っている。そして、同期や部下に対しても感謝の言葉に加えて他の発話をしているのはそれぞれ 1 人ずつに過ぎない。

一方、韓国人は、上司に対しては 12 人のうち 5 人で、半数には及ばないが、同期や部下に対しては過半数の人が、他の発話を加えているのが分かる。感謝の場面でも、日本人に比べて韓国人の発話が多い。



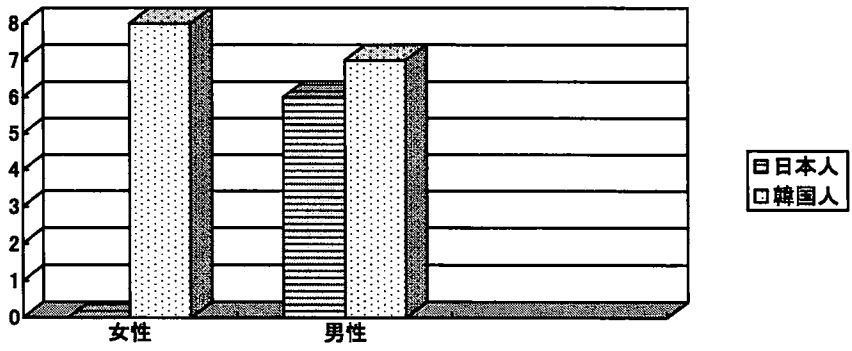
グラフ 3. 感謝の言葉以外に他の発話をした会社員の数

(2) - B 感謝 (大学生)

日韓大学生の発話の量を比較するために設定した感謝の場面は、次のようなものである。映画を見るために親しい友達と待ち合わせをしたが、約束の時間に遅れてしまった。そして映画館の入口前に行ったら、友達が自分の分のチケットまで買ってくれて待っていた。

グラフ 4 は、感謝の場面で、感謝の言葉以外、他の発話をした日韓大学生の数を示したものである。大学生の感謝の場面での調査でも、日本人に比べて韓国人の発話の量が多い。また、韓国人の場合は、男女に著しい差が見られないが（女性：80%、男性：70%）、日本人の場合は男女にかなりの差が認められる（女性：0%、男性：60%）。日本人の女性が感謝の言葉以外に他の発話をした人が 1 人もいないにもかかわらず、日本人の男性は 60% の人が他の発話をしている。それは、日本人の男性が、「本当?」「まじで?」などの発話を感謝の言葉以外に付け加えた人が多かったからである。

友達：チケット？もう二人分買ってあるよ。
 あなた：
 ()
 友達：映画のチケットくらいでお礼を言わなくてもいいよ。



グラフ 4. 感謝の言葉以外の発話をした大学生の数

4.2. 発話形式

「依頼」と「勧め」の場面では、発話形式と発話意図の一致率を調べた。発話形式に関する調査においても、会社員や大学生共に、日本人の話し手に比べて韓国人のほうが、自分の意図と一致する発

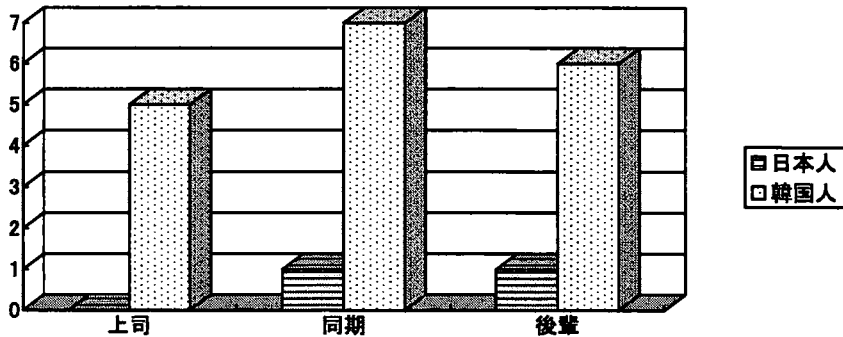
話形式を用いる人の数が多いことが分かった。

(3)－A 依頼（会社員）

場面（3）－Aの質問は「あなたは今とても仕事が忙しくて昼ごはんを食べに行けません。コンビニに行くという以下の相手に、ついでにあなたのサンドイッチを買ってきてほしいと思っています。あなたは以下の相手にどう言いますか」である。この場面では、両国で予測される答えを、疑問文形式を使った間接的な表現「サンドイッチを買ってきてくれませんか」と、疑問文を使わないで自分の意図を明確に伝える直接的な表現「サンドイッチを買ってきてください」の2つに分類した。そして、日本人と韓国人の発話を、この2つの形式を基準に調べた。

グラフ5を見ると、日本人は、上司に対しては0人、同期と部下に対してはそれぞれ1人ずつが直接的な表現形式をとっている。90%以上の方は、疑問文を使って自分の意図を伝えようとしているのが分かる。

一方、韓国人の場合は、上司（5人）を除いて、同期（7人）や部下（6人）に対して半数以上の方が、自分の意図と一致する表現形式を使っている。つまり、依頼の場面で、日本人に比べて韓国人のほうが、より自分の意図と一致する発話形式を使うと言える。



グラフ 5. 疑問文を使わず直接にサンドイッチを買ってくれるよう発話した人の数

(3)－B 依頼（大学生）

依頼の場面での発話形式を調べるために、大学生の調査対象者に設定された場面は場面(2)－Bの続きである。レポート提出の締め切

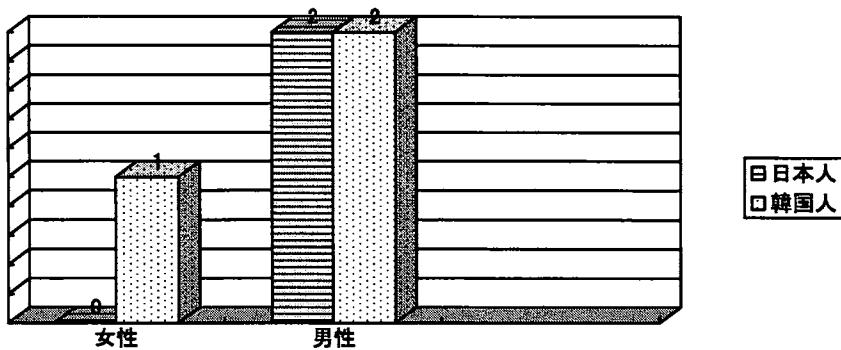
りが過ぎたと担当教員から言われたが、それにもかかわらず、レポートを受け取ってほしいと依頼する場面である。

あなた：

()

先生：頼まれても原則を守らないと他の学生と不平等になるので、受け取ることはできません。

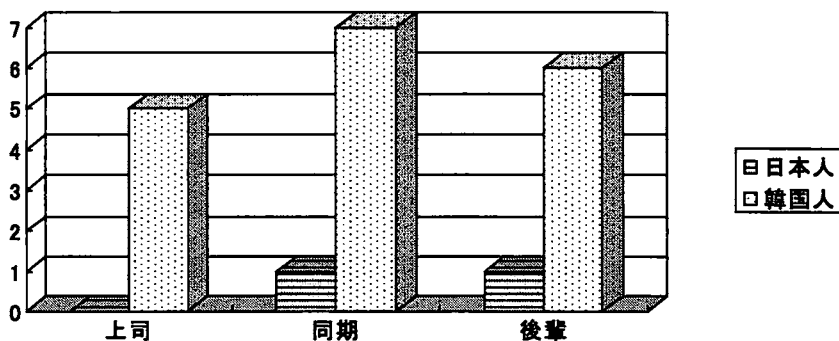
グラフ 6 は、レポートを受け取って欲しいと「～てください」のような表現を使い発話をした大学生の数を示したものである。この場面では、日本人も韓国人も直接的な依頼表現を用いた人の数は 20% 以下で、その使用率が低い。



グラフ 6. 「～てください」のような表現を使い依頼の発話をした大学生の数

(4) - A 勧め (会社員)

場面(4) - A の質問は「あなたは以下の相手の身体の調子が悪そうなので、家に帰って休んだほうがいいと思っています。以下の相手にどう言いますか」である。これに対して予想される答えは疑問文を使った「家に帰って休んだほうがいいんじゃないですか」と、疑問文を使わず直接相手に対して帰宅を勧める「家に帰ってください」である。



グラフ 7. 疑問文を使わず直接に相手を家に帰るように勧めた人の数

グラフ 7 は質問「あなたは以下の相手の身体の調子が悪そうなので、家に帰って休んだほうが良いと思っています。以下の相手にどう言いますか」に対して、直接的表現の「家に帰ってください」を使った人の数を表わしたものである。グラフ 7 を見ると、その分布は、依頼場面 (3) とまったく同じであることが分かる。

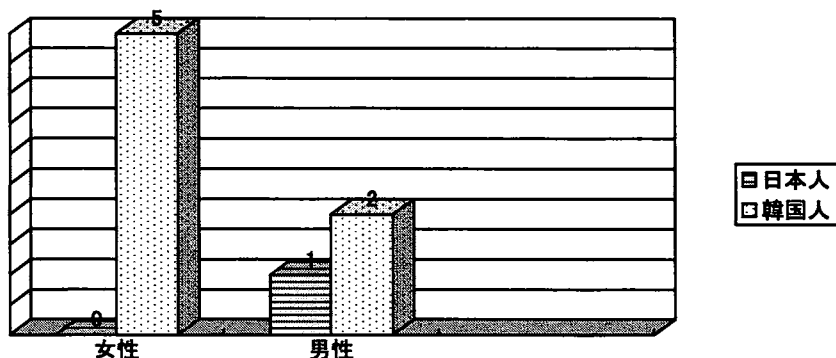
日本人は、上司に対しては 0 人、同期と部下に対してはそれぞれ 1 人ずつが直接的表現形式をとっている。90% 以上の人は、疑問文を使って自分の意図を伝えようとしているのが分かる。一方韓国人の場合は、上司 (5 人) を除いて、同期 (7 人) や部下 (6 人) に対して過半数の人が、自分の意図と一致する表現形式を使っている。勧めの場面でも、日本人に比べて韓国人のほうが自分の意図と一致する表現形式を使った人が多いのである。

(4) - B 勧め (大学生)

場面 (4) - B は、高校時代の後輩に会って、スランプを克服することについてアドバイスをする場面である。

後輩：先輩もあつたんですか。どうやって克服しましたか。いい方法があれば教えてください。

あなた：
()



グラフ 8. 「～して」のように直接指示表現を使って、スランプの克服の方法を勧めた大学生の数

グラフ 8 はスランプを克服するための方法を聞かれて、良いと思う方法を勧める時、「～して」のような指示表現を使った大学生の数を示したものである。この場面でも、発話意図と発話形式が一致したのは、日本人に比べて韓国人の方法が多いことが分かる。特に、日本人の女性は、1人もそのような表現を使った人がいないのに比べ、韓国人の女性は半数以上が「～して」のような表現を使っていることが目立つ。

5. 考察

この章では、日本人と韓国人の調査対象者が実際に記入した発話の例を挙げながら、調査結果について考察する。

5.1. 発話量

本研究の結果から、同じ場面における日本人と韓国人の発話の量は異なることが明確になった。発話量に関する日韓比較研究はほとんどないが、小川（2003）は、日本人の二者間発話量と相手と会話に対する印象について調査を行っている。小川の調査結果で興味深い点は、初対面の二者間の会話で、応答量が均衡していると相手を活動的であると判断し、そして、質問量が均衡していると相手に親しみを感じるという部分である。二者間の発話量が均衡している時にお互い相手に対して好感を持つということは、言い換えれば、日本人は相手の発話量に常に気をつけながら会話をしていると考えられる。

(1)－A 謝罪（会社員）

<日本人>

JW1：遅れてしまって申し訳ございません。

<韓国人>

KW1：업무가 끝나지 않아서 마무리 짓고 오느라고 조금 늦었네요.
죄송합니다.

（仕事が終わらなくて片づけをしてきたので少し遅れました。
申し訳ございません。）

日本人は謝罪表現だけを言っているのに対し、韓国人は謝罪表現と共に遅れた理由を説明している。このように、日本人は謝罪の表現だけを言って、他の情報については聞き手にその判断を任せている。また、日本社会では、遅れた理由を言うことが場合によっては言い訳のように聞こえる恐れがあるので、それを避けようとしているとも考えられる。

一方、韓国人の場合、上例のように遅れた理由を言うほかにも様々な発話している。例えば、「これからは遅れないようにする」とか「会議が終わってからお詫びの意味でコーヒーをおごります」などの発話である。韓国人は、聞き手に判断を任せるより、話し手自らが情報を多く提供して、謝罪の気持ちを伝え、関係を修復しようとしていると考えられる。

任・井出（2004）は、日韓の謝罪について、ストラテジーの観点から調査している。交通事故の際、自分の立場を主張する韓国人と、悪くもないのに「すみません」と謝る日本人の例を出し、その原因を「話すこと」、そして自分の意見を表明することに対する両国の価値観の違いに由来すると分析している。

(1)－B 謝罪（大学生）

<日本人>

JW5：すみませんでした。

<韓国人>

KW1：교수님 죄송합니다. 하지만 제가 이거 정말 열심히 했거든요.

（先生、申し訳ございません。しかし、これ私がとても一生懸命にしました。）

レポート提出の締め切りに間に合わなくて、担当教員に謝罪をする場面である。大学生の調査対象者からも、会社員と同じパターンが見られる。日本人は男子学生の 2 名が遅れた理由について説明するだけで、ほとんどの学生が、「すみませんでした」や「申し訳ございません」のような謝罪表現だけを発話している。

韓国人の場合は、男女の大学生共に「謝罪表現」を用いて謝るほか、遅れてしまった理由などを担当教員に対して積極的に話している。そして、韓国人の発話で目立つのは、「先生」のような呼びかけ表現を用いた人の数である。日本人の中では呼びかけ表現を使った人が 1 人もいないのに比べ、韓国人の場合は、調査対象者の半数以上の人が呼びかけ表現を使って担当教員を呼んでいる。Yoon (2008) によると、韓国語の会話において呼びかけ表現はコンテキスト化の合図としての機能を持つ。この場面での「先生」といった呼びかけ表現も謝罪の気持ちを伝える手段の一つ、すなわちコンテキスト化の合図として使われたと考えられる。

(2) - A 感謝 (会社員)

<日本人>

JM6: : ありがとう。

<韓国人>

KM6: : 동기밖에 없다. 고마워. 잘 먹을게.

(同期が一番だね。ありがとう。いただきます。)

日本人は「ありがとう」のように感謝の表現だけを言っている。一方、韓国人は感謝の表現とともに感謝の気持ちを伝えるための発話をしている。日本人は、謝罪の場面と同じく、他の発話を言わずに感謝の表現だけを発している。感謝の表現だけで十分に感謝の気持ちが相手に伝わっているかのようなのである。これに対して韓国人は、感謝の言葉だけでは十分とは思っていないようだ。そのため、「いただきます」など、他の発話を加えて、自分の気持ちを相手に積極的に伝えようとしていると考えられる。

(2) - B 感謝 (大学生)

<日本人>

JM6: : 本当に？ありがとう。

<韓国人>

KM6: : 와 역시 넌 나의 절친이야. 고맙다.

(わー さすが君は俺のベストフレンドだぜ。ありがとう。)

大学生の感謝の場面においても、日本人と韓国人の発話の違いは明確である。特に女性の回答で、日韓の差が著しいが、韓国人の女性の80%が感謝表現以外の発話をしたのに比べ、日本人女性の中では感謝表現以外の発話をした人が1人もいなかった。しかし、男性の場合、日本人(60%)と韓国人(70%)で目立った差は見られない。それは、日本人の男性の中では、上の例のように「本当に？」を使って感謝の気持ちを伝えようとする人が多かったからである。

一方、韓国人の感謝表現以外の発話は、上の韓国人の例のように、相手を積極的にほめる内容が日本人に比べて多い。また、上の例「さすが君は俺のベストフレンドだぜ」は、会社員の場面での例「やはり同期しかいない」と同じパターンであると言える。両発話ともに、話し手と相手の関係を強調しながら相手をほめるパターンを用いているが、これは韓国語の会話で感謝表現とともにしばしば発話される。

5.2. 発話形式

発話形式において、会社員と大学生の調査共に日本人に比べて韓国人のほうが発話意図と発話形式が一致する発話を用いる傾向があることが分かった。

(3)-A 依頼(会社員)

<日本人>

JW1: 外に行く時間がないから、サンドイッチ買ってもらいたいんだけどいいかな?

<韓国人>

KW1: 나도 배고프니 간단하게 먹을만한 것 좀 알아서 사와.

(私もお腹がすいたから、簡単に食べられるものちょっと買ってきて)

上の例は、後輩に対して依頼をする場合のものである。日本人の場合は、「～かな？」を使ってお願いをしている。しかし韓国人は「～買ってきて」を使っているが、これは、依頼よりむしろ命令に近いと思われる。

一方、同期に対して話す時は、日本人も韓国人も「～して」のような直接的依頼表現を最も多く使う傾向があることが分かった。言い換えれば、両国共に親しい人に対して依頼をする場合、最も直接的な依頼表現を用いると考えられる。

(3) - B 依頼 (大学生)

<日本人>

J M8: 受け取ってもらえませんか。

<韓国人>

K M8: 제발 받아주세요.

(どうか受け取ってください。)

大学生の依頼の場面では、日本人も韓国人も「～してください」のような直接に依頼表現を使った人の数は多くない。会社員の調査では、日韓の差が顕著であったが、大学生に対する調査では韓国人のほうがわずかに多い程度である。それは、依頼の相手が担当教員であることと、依頼の内容が自分の不注意と関わっているからであると考えられる。

(4) - A 勧め (会社員)

<日本人>

JM3: 調子がよろしくないようですが、本日は早く帰って休まれてはどうですか。

<韓国人>

KM6: 상사님 몸이 정말 편찮으신 것 같아요. 나머지 일은 제가 처리할 테니 걱정마시고 들어가서 쉬십시오.

(上司さま、調子が大変よろしくないようです。残りの仕事は私が処理しますので、心配なさらずに帰って休んでください。)

上の例はそれぞれ上司に対して話す場合の例である。身体の調子が悪そうな上司のことを考えて、家に帰って休んだほうがいと勧める場面であるが、日本人の場合は上司に向かって「～てください」のような表現を用いるのが難しいと思われる。一方、韓国人調査対象者の過半数が「～てください」のような表現を使ったのは、積極的に勧めることによって、本当に上司の調子のことを心配しているという気持ちを伝えることができるからであると思われる。

任・井出（2004）は、韓国語の命令形によるあいさつについて論じている。例えば、韓国では、目上の人に対しても食事のとき「おいしく召し上がってください」などを普通に言うなど、日本語の感覚からすれば失礼になりかねない言葉を用いている。しかし、これらは、あいさつの慣用化した形式であると考えれば、日本人にも理解ができると述べている。しかし、本研究の依頼や勧めの場面でも、日本人に比べて韓国人のほうが、命令形の発話形式をより頻繁に用いていることから、これはあいさつの形式だけではなく、発話責任の観点からも説明可能であり、またそれによる説明のほうがより一般性があると思われる。

(4) - B 勧め（大学生）

<日本人>

JW1: 散歩したり。あとは、何日も同じ問題を解いて自信をつける
といいよ。

<韓国人>

KW1: 그냥 놀 땐 놀고 공부할 땐 공부해. 이걸 진리야.

（まあ、遊ぶ時は思い切って遊び、勉強する時は勉強して。
これは真理である。）

スランプの克服の方法を勧める場面である。上の例を見ると、日本人の場合は「～したらいいよ」のように言っている。しかし、韓国人の場合は、「～して」のように相手に直接指示を与えるような表現を用いていることが分かる。勧めの場面においても、依頼の場面と同じく、会社員ほど大学生の回答は日韓でその差があまり目立たない。大学生の場面では、自分の経験に基づく方法を尋ねられているので、厳密に言えば直接的な勧めではない。しかし、それにもかかわらず、韓国人、特に女性は50%の人が「～して」のように直接働きかけるような指示表現を使っているのは興味深い。

一方、元（2008）は日本人と韓国人が勧誘の表現意図をどのような言語表現を用いて話すかを比較分析した。それによると、韓国語は日本語より勧誘の表現意図と言語表現が一致するケースが多いと指摘されている。元（2008）は、このような違いを両国のポライトネス戦略の違いと関連づけて論じている。

6. おわりに

本研究の調査結果から、日本人に比べて韓国人のほうが発話量が多く、発話形式と発話意図の一致率が高いことが分かった。つまり、日本語と韓国語を比較すると、日本語は<聞き手責任>で、韓国語は<話し手責任>であるという分類を肯定していると言える。これは、Yoon (2009) の主張を支持しうるものと思われる。ハインズは日本語と韓国語を同じく<聞き手責任>であると主張しているが (Hinds, 1987)、本研究の調査結果はこの主張と相反する。そのため、彼の理論は今後再検討される必要があると考えられる。

ハインズの調査は日本語のテキストの分析を通じて、日本語と韓国語は同じグループに属するという主張をしている。しかしながら、Hinds (1987)では、その主張を裏付ける具体的な韓国語のテキストの分析例が提示されていない。今後は、日本語と韓国語の具体的なテキストレベルでの<書き手責任> (writer-responsibility) と<読み手責任> (reader-responsibility) について考察する必要がある。また、今回の調査は大学 (学生) および職場 (会社員) の場面に限られているが、さらに別の場面での人間関係を考慮した調査が必要であろう。

参考文献

- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hinds, J. (1987). Reader Versus Writer Responsibility: A New typology. In U. Connor and R.B. Kaplan (eds.), *Writing Across Languages: Analysis of L2 Text* (141-152), MA: Addison-Wesley.
- Yoon, S. (2008). Comparison between Korean and Japanese Address Terms as Contextualization Cues in Husband-Wife's Dialogues. *Inquiries into Korean Linguistics*, 3, 377-387.
- Yoon, S. (2009). A Contrastive Study of Metacommunicative Functions of Address Terms between Husband and Wife in Korea and Japan. *Current Issues in Unity and Diversity of Languages*, 3819-3831.
- 池上嘉彦 (2001). 『「日本語」論への招待』. 講談社.
- 小川一美 (2003). 二者間発話量の均衡が会話者が抱く相手と会話に

対する印象に及ぼす効果、『京都大学教育研究』46, 37-42.
元智恩(2008).『白い巨塔』における日韓の勧誘の言語行動, 東亜細亜日本学会『日本文化研究』, 91-107.
任榮哲(2006).『韓国人による日本社会言語学研究』.おうふう.
任榮哲・井出里咲子(2004).『箸とチョッカラク』.大修館書店.
尹秀美(2008).呼びかけ表現を好む韓国人、呼びかけ表現を避ける日本人 —コンテキスト化の合図という観点から—, 『韓国語学年報』4, 21-31.